

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13341

研究課題名（和文）暴力事犯者における暴力のリスク・保護要因を基盤としたリスクマネジメントの導入

研究課題名（英文）Risk Management based on risk and protective factors in violent offenders

研究代表者

西中 宏史（Nishinaka, Hirofumi）

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：30568788

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究により、刑事施設入所者の暴力犯罪、財産犯罪、薬物犯罪における再犯のリスク要因の違いを示し、それぞれの犯罪タイプのリスクに関する特徴が明らかとなった。また、刑事施設出所者において、再犯に関する保護要因の評価ツール（Structured Assessment of PROtective Factors for Violence Risk: SAPROF）の有用性について検討した。保護要因の評価にあたり、利用する情報を広範に得ることが求められるなどの課題はあったが、半年後の変化を捉えることができ概ね有用であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、犯罪者のタイプによるリスク要因の特徴を示すことができた。また、リスクアセスメント・ツールの有用性を示した。日本の矯正・保護の領域において、再犯の防止のための有益な知見の蓄積となり、社会的意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：This study demonstrated differences in risk factors for recidivism in violent offenses, property offenses, and drug offenses among inmates of penal institutions and identified characteristics related to risk for each offense type. The study also examined the usefulness of the Structured Assessment of PROtective Factors for Violence Risk (SAPROF) tool for assessing protective factors for recidivism among offenders released from penal institutions. Although there were some issues in the assessment of protective factors, such as the need to obtain a wide range of information, the SAPROF was generally useful in capturing changes after six months.

研究分野：司法・犯罪心理学

キーワード：受刑者 出所受刑者 犯罪者 リスク要因 保護要因 リスクアセスメント リスクマネジメント

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

刑事施設や保護観察所では、再犯防止を目的に犯罪者に対してプログラム等介入がなされる。国外では、介入が有効に機能するためには、再犯に対するリスク・保護要因を評価し、リスクマネジメントを行うことが必要であると広く考えられている。そして、リスクアセスメントには心理測定学的な有効性を備えたリスクアセスメントツールの使用が必須とされる(Doyle and Duffy, 2006)。しかしながら、研究開始当初において、我が国の再犯に対するリスク・保護要因に関する知見は不足しており、犯罪者処遇においてリスクアセスメントツールの有用性が検討された研究報告はなかった。実戦においても十分とはいえず、介入プログラム等がリスクマネジメントの観点から評価され、見直されることがない状況にあった。したがって、我が国の矯正および保護における犯罪者処遇にあたり、再犯のリスク要因を明らかにすることが重要な課題あり、我が国の矯正・保護において有用なリスクアセスメントツールの開発が求められていた。

2. 研究の目的

(1) 我が国の刑事施設入所者において、暴力事犯、財産犯、薬物事犯、性犯罪に特徴的なリスク要因を明らかにする。(研究1)

(2) 我が国の出所受刑者において、保護要因のリスクアセスメントツールである Structured Assessment of PROtective Factors for Violence Risk (SAPROF; De Vogel Robb  et al., 2012) の有用性を明らかにする。(研究2)

3. 研究の方法

(1) 男性の刑事施設入所者 585 名(年齢: 45.56 ± 10.96) に対し、犯罪種別、罪種数、刑事施設入所回数、未成年での犯罪・非行の有無、暴力団加入経験の有無、養育問題の有無について情報を収集し、The Japanese Criminal Thinking Inventory (JCTI; Kishi et al., 2014) について回答を求めた。(研究1)

(2) 男性の更生保護施設利用者(出所受刑者) 11 名(年齢: 49.09 ± 10.04) に対して、更生保護施設利用開始 1 ヶ月以内にインタビューにより必要な情報を得て、2 名の評価者により SAPROF を評価して評価者間信頼性を求めた。

研究参加者 11 名の内 9 名(年齢: 46.11 ± 12.29) については、施設利用終了 1 ヶ月以内に再度インタビューにより必要な情報を得て SAPROF を評価し保護要因の変化を観察した。平均観察期間は 123.44 日であった。(研究2)

4. 研究成果

(1) 刑事施設入所者の犯罪タイプによるリスク要因の特徴(研究1)

ロジスティック回帰分析により、犯した罪種数の多さは、暴力犯罪(OR = 2.23, 95% CI: 1.75-2.84, p < 0.001) と財産犯罪(OR = 3.70, 95% CI: 2.65-5.13, p < 0.001) のリスクとして特徴的であった。また、幼少期の養育問題(OR = 2.32, 95% CI: 1.36-3.95, p < 0.001) と暴力団加入経験(OR = 2.54, 95% CI: 1.53-4.23, p < 0.001) は暴力犯罪のリスクを増加させた。薬物犯罪のリスクは、刑事施設入所回数の多さ(OR = 1.15, 95% CI: 1.02-1.30, p = 0.019) 暴力団加入経験(OR = 2.51, 95% CI: 1.74-3.61, p < 0.001) 犯罪思考の増加(OR = 1.34, 95% CI: 1.12-1.59, p = 0.001) と関連していた。暴力犯罪、財産犯罪、薬物犯罪を犯した犯罪者とこれらの犯罪を犯していない犯罪者の間には危険因子に違いがある。これらの知見は、異なるタイプの犯罪をおこなった犯罪者のリスクを評価し、処遇することにおいて、示唆を与えるものとなった。

(2)-1 刑事施設入所者における SAPROF の評価者間信頼性(研究2)

SAPROF のそれぞれの項目についてカッパ係数を算出した(表1)。知能については、IQ に基づいて評価するため、評価者間で完全に一致している。また、仕事や余暇活動についても更生保護施設に入所したばかりで職も趣味もできていない状況は明らかであったので完全に一致となっている。生活環境と外部からの監督についても、研究参加者の全員が更生保護施設に入所している環境にあるため、完全な一致となった。幼年期の愛着形成、対処能力、金銭管理、専門的ケアについては十分な評価者間信頼性が得られたと考えられる。しか

表1. 2名の評価者におけるSAPROFの評価点とカッパ係数

SAPROF 項目	評価者 1	評価者 2	K	p-value
内的要因				
1 知能	0.91 ± 0.54	0.91 ± 0.54	1.000	0
2 幼年期の愛着形成	1.64 ± 0.81	1.09 ± 0.70	0.267	0.011
3 共感性	1.09 ± 0.54	1.27 ± 0.79	-0.143	0.437
4 対処能力	0.64 ± 0.67	0.73 ± 0.65	0.843	< .001
5 セルフコントロール	1.09 ± 0.70	0.64 ± 0.50	0.07	0.712
動機づけ要因				
6 仕事	0	0	1.000	0.001
7 余暇活動	0	0	1.000	0.001
8 金銭管理	0.27 ± 0.65	0.27 ± 0.47	0.389	0.052
9 治療への動機づけ	0.73 ± 0.79	0.82 ± 0.75	0.286	0.192
10 権威に対する姿勢	1.64 ± 0.50	0.64 ± 0.67	-0.237	0.194
11 人生の目標	0.82 ± 0.75	0.73 ± 0.90	0.321	0.097
12 服薬	-	-	-	-
外的要因				
13 ソーシャルネットワーク	1.00 ± 0.45	0.73 ± 0.47	0.043	0.842
14 親密な関係	0.45 ± 0.82	0.09 ± 0.30	0.175	0.299
15 専門的ケア	1.36 ± 0.92	0.91 ± 0.70	0.402	0.005
16 生活環境	1.00 ± 0.00	1.00 ± 0	1.000	< .001
17 外部からの監督	1.00 ± 0.00	1.00 ± 0	1.000	< .001

し、共感性、セルフコントロール、治療への動機付けなどでは統計的に有意な結果は得られなかった。

半数以上の項目で良好な評価者間信頼性が得られたが、評価にあたり信頼性を高めるには、公的記録や質問紙等の心理尺度の情報も合わせて得られることが望ましいと考えられる。

(2) -2 刑事施設出所者における更生保護施設利用期間の SAPROF の保護要因の変化(研究2)

更生保護施設利用者は、施設利用中に職につき、安定した収入を得ることができ、更生保護施設の支援の有効性が示された。また、施設入所中に、家族や友人、仕事仲間、自助グループ等へ接触し、ソーシャルネットワークを広げられたと考えられる。退所後も施設職員との関係が維持されることも期待された。更生保護施設の利用が終了した後は多くの者が、刑期を終え、単身生活を送ることで、更生保護施設の保護的な環境や保護観察所の監督を外れることが示されている。生活環境や監督といった保護要因がなくなることを考えれば、対処能力やセルフコントロール、治療への動機づけ等の得点の上昇が望ましい。更生保護施設においても何らかの支援が行われることが重要となる。

以上のように、SAPROF により更生保護施設における支援の有効性と課題が示されたことは、入所者のリスク・マネジメントおよびリスク・アセスメントに SAPROF を用いることが有効であることを示唆する。

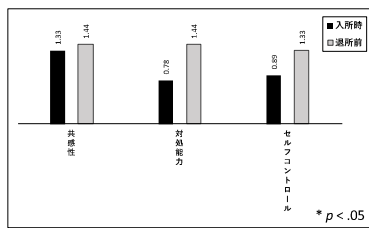


図1. SAPROF内的項目の変化

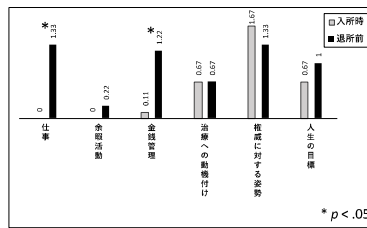


図2. SAPROF動機づけ項目の変化

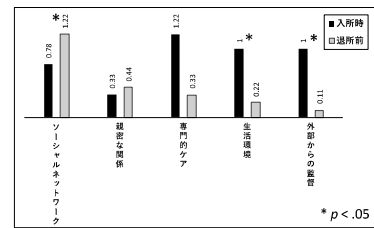


図3. SAPROF外的項目の変化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西中宏史、五十嵐禎人	4. 巻 37
2. 論文標題 攻撃的行動の神経科学的研究の現状	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科（心療内科）	6. 最初と最後の頁 349-345
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西中宏史、東本愛香、五十嵐禎人
2. 発表標題 刑事施設入所者の更生保護施設入所期間における保護要因の変化-SAPROF動的要因に注目して-
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西中宏史、東本愛香、五十嵐禎人
2. 発表標題 更生保護施設入所者を対象としたSAPROFの評価者間信頼性
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 東本愛香、田中美以、高尾正義、山口保輝、西中宏史、大場玲子、五十嵐禎人
2. 発表標題 保護観察所における性犯罪者処遇の在り方に関する調査
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西中宏史、東本愛香、五十嵐禎人
2. 発表標題 更生保護施設における出所受刑者の問題行動に関わるリスク要因と保護要因 - リスクアセスメント・ツールの活用 -
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 東本愛香、新津富央、西中宏史、椎名明大、清水栄司、伊豫雅臣、五十嵐禎人
2. 発表標題 司法精神保健におけるリスク・アセスメントの普及への取り組み
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西中宏史、東本愛香、野村和孝、五十嵐禎人
2. 発表標題 男性成人受刑者の罪種によるリスクと犯罪思考の特徴
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 東本愛香、西中宏史、野村和孝、五十嵐禎人
2. 発表標題 累犯刑務所におけるメンタルヘルスの課題
3. 学会等名 日本司法精神医学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------